

論文原稿作成のための手引き（2024年3月改訂版）

発達心理学研究編集委員会

1. 原稿作成に際しての注意事項

1.1 倫理への配慮

倫理への配慮

- a. 投稿論文の内容および研究手続き全般において、人権の尊重と福祉に十分配慮するとともに、『一般社団法人日本発達心理学会倫理綱領・倫理規程』（本会ホームページ参照）に従う。倫理的配慮の詳細については、『日本発達心理学会（監修）.（2000）.心理学・倫理ガイドブック：リサーチと臨床.東京：有斐閣.』を参照する。
- b. 人権の尊重と福祉に配慮した旨を、論文中に明記するとともに投稿論文チェックリストで点検する。

1.2 用紙設定

用紙設定は、A4判とする。

1.3 部数

提出部数は、PDFファイル形式で、1部とする。

1.4 用紙の置き方と書き方

- a. 用紙は縦置きにして、横書きする。
- b. 論文では原則として常用漢字、現代かなづかいを用い、簡潔、明瞭に記述する。
- c. 句読点には“,”と“。”を使用する。
- d. カタカナは、原則として日本語化した外国語を記述する時にのみ用いる。
- e. 本文中の外国語の使用はできるだけ避け、外国人名、適切な日本語訳のない学術語、書物やテスト名などにのみ用いる。
- f. 数字は原則として算用数字を用いる。
- g. 略語は一般に用いられているものに限る。ただし、必要な場合には、初出の時にその旨を明記する。

1.5 字数・ページ数・語数・余白

- a. 字数は1ページ1200字（40字×30行）とする。これは刷り上がり1/2ページ分に相当する。英語要約の場合は1行の語数は自由だが、30行/ページとする。原稿には、行数の通し番号を付ける。
- b. 原著論文および実践論文の長さ（論文題・日本語要約・本文・文献・資料・脚注・表・図・英語要約・付記等すべてを含む）は刷り上がり12ページ以内とする。なお、本誌1ページ大のものは1200字原稿2ページに相当する。
- c. 報告論文の長さは（論文題・日本語要約・本文・文献・資料・脚注・表・図・英語要約・付記等すべてを含む）は刷り上がり8ページ以内とする。なお、最終的に論文の種別が変更となり、報告論文になる場合は、論文の分量超過を認める。
- d. 展望論文の長さは（論文題・日本語要約・本文・文献・資料・脚注・表・図・英語要約・付記等すべてを含む）は刷り上がり15ページ以内とする。
- f. 意見論文の長さ（論文題・本文・文献等すべてを含む）は刷り上がり2ページ以内とする。意見論文では原則として図表は使用しない。
- g. 論文題と著者名には500字程度を要する。図表はページの半幅または全幅に収まる大きさにし、予想される紙面から必要な字数を算出する。
- h. 日本語要約の長さは400～600字とし、英語要約の長さは100～175語とする。
- i. 日本語インパクトの長さは150～200字とし、英語インパクトの長さは50～70語とする。
- j. 原稿の上・下・左・右に3cm以上の余白をとる。

1.6 日本語要約と英語要約

- a. 日本語及び英語の要約、インパクト、キーワードを書く。インパクトとは、投稿論文において報告された研究の学術的および社会的な価値や影響を意味する。心理学に精通した研究者以外の読み手にも研究のインパクトが明確に伝わるように記述すること。インパクトの定義については「発達心理学研究 審査の基本方針」(https://www.jsdp.jp/contents/~cmhenshu/paper/examination_policy.html)も参照すること。
- b. 日本語及び英語の要約はそれぞれの言語の特徴に配慮して作成する。英語要約と日本語要約とが逐語的に対応している必要はない。日本語及び英語の要約には著者名は書かない。
- c. 英語の論文題、要約、インパクトは、投稿する前に、心理学に精通したネイティブスピーカー（あるいはそれに相当する方）の校閲を受ける。
- d. 日本語及び英語の要約の後に、改行してから日本語及び英語のインパクトをそれぞれ書く。インパクトは、“【インパクト】”（英語要約の場合は“【Research Impact】”）と書いてから半角の空白をとって書きはじめる。
- e. 日本語及び英語のインパクトの後に、改行をしてから 5 語以内のキーワードをつける。キーワードは、“【キーワード】”（英語要約の場合は“【Keywords】”）と書いてから半角の空白をとって書きはじめる。キーワードは太字体（ボールド）にする。
- f. 英語の論文題、要約、インパクト、キーワードは、「掲載可」となった段階で提出することもできる。掲載可後の提出を希望する場合、英語の論文題と要約それぞれに、「掲載可後に提出希望」と記す。

1.7 論文題

論文題は論文の主な内容を簡潔に要約したもので、研究の対象、研究でとりあげた変数あるいは理論と、それらの間の関係の記述が含まれているのが望ましい。副題をつける場合は、本題の後に“:(コロン)”を書き、その後に副題を続けて書く。

例 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求：2年間の変化とその要因
「……に関する研究」「……について」などの冗長な語句は省く。

1.8 見出し

- a. 論文で使える見出しは、中央大見出し・横大見出し・横小見出しの 3 種類とする。見出しは太字体（ボールド）にする。
- b. 中央大見出しは上に 1 行あけて中央に書く。
- c. 横大見出しは左寄せで書き、文章は改行して書きはじめる。
- d. 横小見出しは 1 字下げて書き、文章は同じ行に全角の空白の後、書きはじめる。

1.9 脚注

- a. 脚注の数は最小限にとどめる。
- b. 脚注を使用する場合は、本文中の該当箇所の右肩に小文字で“1)”、“2)”、……の通し番号をつけ、その内容を別紙に 1 つずつ改行しながら、まとめて書く。
例 1 1) 現所属：京都大学大学院教育学研究科（別紙で）
例 2 ……ヴァイランド適応行動尺度²⁾ ……（本文で）
2) この尺度は、コミュニケーション ……（別紙で）

1.10 付記

付記の内容は、項目ごとに改行しながら、1 枚の別紙にまとめて書く。

1.11 欄外見出し

- a. 欄外見出しを論文原稿すべての上余白内に右寄せでつけるのが望ましい。
- b. 欄外見出しは論文題の一部で構成し、全角で 15 字以内とする。
- c. 欄外見出しが設定できない場合は省略してもよい。

1.12 原稿の並べ順と通し番号

- a. 原著論文・実践論文・報告論文・展望論文の原稿は、必要なものには通し番号をつけて、上から次の順番に並べて、1 つのファイルにする。なお、チェックリスト、添付票、理由書はウェブシステムに入力し、提出する。

並べ順	通し番号のつけ方
論文題（日本語・英語）	通し番号はつけない。1 ページ分を使用する。
日本語要約	通し番号はつけない。1 ページ分を使用する。
本文	改ページをして、通し番号は第 1 ページから。
文献	改ページをして、通し番号は本文に続ける。
資料	改ページをして、通し番号は文献に続ける。
脚注	通し番号はつけない。必要ページにまとめて書く。
表 (Table)	通し番号はつけない。1 ページに 1 個ずつ書く。
図 (Figure)	通し番号はつけない。1 ページに 1 個ずつ書く。
英語要約	通し番号はつけない。1 ページ分を使用する。
付記 *	通し番号はつけない。必要ページにまとめて書く。
* 個人情報を含む付記は、投稿時には提出を保留し、完成稿提出時に加えることとする。	
以下は別ファイルにして提出する。	
修正対照表	通し番号はつけない。修正後あるいは過去に本誌で掲載不可の判定を受けた再投稿の場合は作成する。
関連論文	投稿論文と内容的に特に関係の深い同一著者による公刊または公刊予定の論文がある場合は提出する。

ファイル作成に際して次の点に注意する。

- (1) 上の並べ順は印刷された場合の順番ではない。該当するものがない場合（例えば、資料がない）は、それを除いて原稿を並べる。
 - (2) 通し番号は下余白の中央に、できれば「-1-」か「[1]」の形でつける。
- b. 意見論文の原稿は、必要なものには通し番号をつけて、上から次の順番に並べて、1 つのファイルにする。なお、添付票はウェブシステムに入力し、提出する。

並べ順	通し番号のつけ方
論文題（日本語・英語）	通し番号はつけない。1 ページ分を使用する。
本文	改ページをして、通し番号は第 1 ページから。
文献	改ページをして、通し番号は本文に続ける。

2. 図の描き方

2.1 用紙と余白

- a. A4 判の白紙に書く。
- b. 1 つの図ごとに別紙に作成する。
- c. 上下左右に 3 cm 以上の余白を残す。

2.2 大きさ

図は 1/2 以下に縮小されるので、そのことを念頭において作図する。ただし、投稿の際には適当な大きさに縮小・拡大する。

2.3 描き方

4

- a. 原図は黒色で明瞭に描く。
- b. 投稿にあたっては必ずしも原図に近いものを送る必要はないが、掲載が決まった段階で提出が要求される場合がある。
- c. 結果を図で表示する際、どんな図（例えば、棒グラフ・折れ線グラフ・散布図）を選択し、どのように描くか不明の場合は、8.5a. に示した文献を参考にする。
- d. パソコンソフトなどで製図する場合、適当な大きさに縮小・拡大して原稿に挿入する。出力された図が論文にそのままの形で掲載可能かどうか吟味し、必要ならば付加的な加工を依頼して完成した図を提出する。そのまま掲載が困難な図の場合には仮図とし、2.12 の製図依頼をする。

2.4 線幅・記号・文字の大きさ

図の中の文字・数字・記号の大きさは、刷り上がりで本文の文字と同じ大きさか、やや小さめに揃える。また、同じ図に大きさの違う文字や幅の違う線を用いることを避ける。

2.5 図番号と図題（図の説明と図の注）（資料1、資料2参照）

- a. 図には Figure 1、Figure 2、……のように算用数字の通し番号をつけ、図番号と図題は、図の下に書く。図番号は太字体（ボールド）にする。
- b. 図題は図の説明と図の注からなる。図の説明は、半角の空白をとって図番号に続けて書く。図の説明は斜体（イタリック）にする。図の注は、“（ ）”でくくって、図の説明に続けて文章形式で書く。
例1 **Figure 1** 基本型の自己質問・他者質問で行為反応が出現した子どもの年齢群ごとの割合（各群の平均年齢・年齢の範囲はそれぞれ以下の通り：年少児（平均 3;8,範囲 3;3-4;3）、年中児（平均 4;6,範囲 4;3-5;2）、年少児（平均 5;7,範囲 5;3-6;2）
例2 **Figure 4** 両親の夫婦間葛藤、子どもに対する親行動、子どもの親行動知覚と子どもの抑うつ症状の関係についての最終モデル（Aに続く太数字は愛知サンプル男子の結果、斜体数字は愛知サンプル女子の結果を表す。Fに続く太数字は福島サンプル男子の結果、斜体数字は福島サンプル女子の結果を表す。）
- c. 図の注は本文なしでも理解できるように、必要最小限度の事項を簡潔にもれなく説明する。ある程度の分量になっても構わない。略語や略記号を使用する場合は必ず注をつける。

2.6 英文の使用

図題、図中の表記は英文にしてもよい。

2.7 縦軸・横軸

- a. 軸には、目盛印・目盛数字・単位を入れる。
- b. 縦軸の説明は、日本語の場合は上から下に、英語の場合は下から上に書く。略語や略記号はできるだけ用いない。
- c. 原点がある場合は、0（ゼロ）を入れる。
- d. 小数点のある数値の表記と有効桁数は、数値の性質を考慮して決める。

2.8 スケール

装置図や図版などには、大きさの目安を与えるために、スケールを描きこむか、大きさについての注を書く。

2.9 写真

- a. 写真は図扱いになるので、線画と一緒に統一した通し番号をつけ、図題をつける。
- b. 写真はスキャナーで読み込むなどして、A4用紙に印刷する。

2.10 図の数

図の数に制限はないが、図と表の重複（例えば、数値をグラフで示した図と数値を一覧にした表をともに掲載）を避け、最小限度になるように努める。

2.11 挿入位置の指定

- a. 本文右余白に「Figure 1 挿入」のように書いて、挿入希望箇所を明示する。
- b. 複数の図・表を同一箇所に連続して挿入する場合は、「Figure 1・Figure 2・Table 1 挿入」のようにまとめて書く。

2.12 製図の依頼

- 製図を依頼する場合は、図の原稿に「製図依頼」と明記する。
- 製図を依頼する場合は、経費は著者負担とし、編集委員会が印刷会社に発注を代行する。
- 編集委員会で製図の必要があると判断した場合は、著者の了解を得て、2.12b. と同様の扱いをする。

3. 表の書き方

3.1 用紙と余白

- A4判の白紙に書く。
- 1つの表ごとに別紙に作成する。
- 上下左右に3cm以上の余白を残す。

3.2 表番号と表題（資料3参照）

- 表には Table 1、Table 2、……のように算用数字の通し番号をつけ、表番号と表題は、表の上を書く。表番号は太字体（ボールド）にする。
- 表題は、半角の空白をとって表番号に続けて書く。表題は斜体（イタリック）にする。
例 **Table 2** 二重課題およびマッチング刺激の各組み合わせにおける課題ごとの平均反応時間 (ms) と標準偏差

3.3 英文の使用

表題、表中の表記は英文にしてもよい。

3.4 罫線

罫線は少なくして見やすい表にする。特に縦の罫線は、必要な時以外は用いない。

3.5 小数点や±の位置

- 小数点や±の位置は原則的に揃える。また、データが見出しの中央に位置するように配列する。
- 小数点のある数字の表記と有効桁数は、数値の性質を考慮して決める。

3.6 注

- 本文を読まずに表だけで十分な理解ができるように、必要最小限度の簡潔な注をつけるのが望ましい。略語や略記号を使用する場合は必ず注をつける。
- 表全体への注は、表の下に“注.”（英文の場合は“Note.”）と記し、半角の空白をとって文章で述べる。
例 注. () 内は比率。
- 特定箇所への注は、該当箇所の右肩に“a)”, “b)”, ……をつけ、その内容を 3.6b. の注の下に示す。
- 有意性検定の有意水準に関する注は、該当箇所の右肩に“*”を用いて記し、その内容を 3.6c. の注の下に示す。その際、 $p < .05$ は“*”, $p < .01$ は“**”, $p < .001$ は“***”とする。

例 1 (3.6b、 c、 d. の注を使った場合)

注. 数字は頻度を、() 内の数字は率を示す。

a) 年齢 3 群間の平均値の分散分析による検定結果。

* $p < .05$

例 2 (3.6b、 c、 d. の注を使った英文の場合)

Note. See Egeland, Sroufe, & Erickson (1983) for detailed parent-child interaction rating scale definitions.

a) This factor consists of only one scale.

* $p < .05$, ** $p < .01$

- 有意水準 α は帰無仮説を棄却するための事前に定めた境界値であり、 p 値は帰無仮説が成り立つ可能性の確率を示している。 p 値を記載する場合には、方法で有意水準を明示してから適宜結果として示す。また、統計パッケージで $p = .00000$ と表現されてしまう場合には、 $p < .001$ などと、確率ゼロと誤解されない表記を行う。

3.7 表の数

表の数に制限はないが、表と図の重複（例えば、数値を一覧にした表と数値をグラフで示した図をともに掲載）を避け、最小限度になるように努める。

3.8 挿入位置の指定

- 本文右余白に「Table 1 挿入」のように書いて、挿入希望箇所を明示する。
- 複数の図・表を同一箇所に連続して挿入する場合は、「Figure 1・Figure 2・Table 1 挿入」のようにまとめて書く。

4. 統計量の表記

4.1 検定結果の表記

帰無仮説を明記するとともに、分析結果を正確に伝えるために、次の必要最小限度の統計量を表記する。

- データの基本統計量（平均値、標準偏差、サンプルサイズ、相関係数など）。
- t 、 F 、 χ^2 検定の場合は、検定の手法、 t 、 F 、 χ^2 の各値、自由度（ χ^2 検定の場合はサンプルサイズも）、有意水準、できる限り効果量も記載する。
 - 例 1 …… 4 歳群 ($M=4.62, SD=2.43$) は 3 歳群 ($M=2.09, SD=2.26$) より……に関して有意に高い得点を示した ($t(22)=2.62, p<.05$)。(() 内は自由度、表に平均値・標準偏差が示されていない場合の例)
 - 例 2 χ^2 検定の結果、男女の人数の偏りが有意であった ($\chi^2(4, N=90)=10.51, p<.05$)。(() 内は自由度とサンプルサイズ)
 - 例 3 分散分析の結果、年齢要因での有意な主効果が認められた ($F(1, 34)=27.07, p<.01, \eta^2=.06$)。(() 内は自由度)
- 分散分析法で水準間の差を見るために下位検定を用いる場合などは、検定の多重性に気をつける。
- その他統計量の表記については、APA の Publication Manual の “Statistical Abbreviations and Symbols” に準拠する。

4.2 多変量解析

多変量解析の中で一義的に解が得られない（使う方法で結果が違う）方法を用いる場合には、その手法について明示する。

- 因子分析については、変数名・共通性初期値の推定方法・計算方法・因子数の決定基準・回転技法・因子パターンもしくは因子負荷量・共通性・因子間相関および因子寄与を表現する数値、また、因子得点を用いる場合は因子得点算出法などを明記する。因子パターン（因子負荷量）については、表で示すことが多いが、できるだけ全変数を示す。どうしても紙面の都合で全変数が表記できない場合には、値の大きいものを降順に表記する。
- 構造方程式モデリング（SEM：共分散構造分析）を用いる場合には、モデル選択についての経過を示す。また、パス図を示してモデルを明示する。
- 重回帰分析については、回帰式の係数、重相関係数もしくは決定係数（あるいはこれに準ずる値、例えば分散分析表）を明記する。また、ステップワイズ法については変数選択技法・トレランスを明記する。
- クラスター分析については、距離の測度・クラスタリングの技法・クラスター数を決定した基準などを明記する。
- 他の多変量解析の表記については、上記に準ずる。

4.3 統計パッケージ

用いた統計処理の計算が正しいことを示すために、SAS や SPSS などの統計パッケージを使用した場合は、使用したパッケージ名（バージョン・リリース番号を含む）を明記する。使用していない場合は、用いた計算方法がわかるようにする。

5. 「文献」の記載方法と文献の引用方法

5.1 「文献」記載の一般的規則

- 引用文献は論文の最後にまとめて置き、見出しは「文献」とする。
- 「文献」に記載された文献は本文で必ず引用されなければならない。また、本文で引用された文献は必ず「文

献」の中に記載されている必要がある。

- c. 1つの文献の記載が2行以上にわたる場合には、2行目からは全角2文字分の空白の後に記載する。
- d. 記載に使われるピリオド・コンマ・丸かっこは、日本語文献・外国語文献とも、半角のものを使用する。

5.2 文献の並べ方

- a. 文献は、日本語文献と外国語文献を分けずに、著者（共著の場合は第1著者）の姓によるアルファベット順に並べる。
- b. 同一著者が単独で発表している文献と、第1著者として発表している共著文献がある場合には、単独発表のものを先にし、次に共著のものを並べる。
例 「Tajima, N.」「Tajima, N., & Suda, O.」の順。
- c. 第1著者が同一で第2著者が異なる場合は、第2著者の姓の順に並べる。第3著者以下も同様の扱いにする。
例 「Muto, T., & Iwatate, S.」「Muto, T., & Uchida, N.」の順。
- d. 同一の著者あるいは同一配列の共著者の文献が複数ある場合には、刊行年次によって早いものから順に並べる。
例 1 「Takahashi, M. (1989).」「Takahashi, M. (1991).」の順。
例 2 「Ninomiya, K., & Inoue, H. (2000).」「Ninomiya, K., & Inoue, H. (2002).」の順。
- e. 著者名が同じで刊行年次も同じ文献は、表題のアルファベット順（“A”と“The”は除く）に並べ、年次を示す数字の直後に、早いものから順にアルファベット小文字 a, b, ……をつけて区別する。
例 「Nishino, Y. (1991a). Cognitive……」「Nishino, Y. (1991b). Effect……」の順。
- f. 同じ姓をもった複数の著者の場合は、最初の頭文字（日本語文献では名）の順に並べる。
例 1 「Hayashi, A.」「Hayashi, H.」の順。
例 2 「Lewis, C.」「Lewis, M.」の順。

5.3 日本語文献の記載方法

- a. 著者名は姓と名を続けて書く。ただし、姓と名を合わせて3文字以下の場合には、姓と名の間に全角の空白を入れる。名の後にはピリオドをうつ。
例 1 柏木恵子。
例 2 中垣 啓。
- b. 共著の場合には、著者名の間に“・”を入れて並べる。
例 無藤 隆・岩立志津夫。
- c. 団体名義の著作物は正式の名称を略さずに書き、個人著者名と同様、アルファベット順に並べる。なお、日本名の団体はローマ字読みにする。
例 一般社団法人「臨床発達心理士」認定運営機構（編）。
- d. 書籍の場合には、著者名・刊行年次・表題・出版社を順に書く。著者名の後にはピリオドをうつ。編者には“（編）”を編者名の後に付記する。刊行年次は“（ ）”でくくりピリオドをうつ。表題は斜体（イタリック）にし、最後に（副題がある場合はその後）ピリオドをうつ。副題は“：（コロン）”の後に書く。出版社の前には“：（コロン）”をはさんで所在地を書き、最後にピリオドをうつ。出版社の所在地は本社のある都道府県名あるいは市名から選び、“都道府県”や“市”はつけない。
例 1 東 洋. (1994). *日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて*. 東京：東京大学出版会。
例 2 やまだようこ（編著）. (2000). *人生を物語る：生成のライフストーリー*. 京都：ミネルヴァ書房。
- e. 初版と異なる内容の版である場合、版数などを“（ ）”内に明記しピリオドをうつ。
例 村田孝次. (1990). *児童心理学入門*（三訂版）. 東京：培風館。
- f. 翻訳書の場合、著者名は原名かローマ字（アルファベットを使用しない言語の場合）にする。不明の場合はカタカナにし、共著の場合には著者名の間に“・”を入れて並べる。刊行年次は翻訳書の発行年次とする。翻訳者には“訳”をコンマの後に付記し、翻訳代表者には“監訳”を付記する。原著が参照できる場合には最後に原著を“（ ）”内に示し、参照できない場合には原著の刊行年次だけを示す。なお、翻訳書を文献に記載する場合は、本文中では、5.5a. の例 5（Freud, 1923 / 1961）のように、必ず原著と翻訳書の刊行年次を示す。
例 1 Premack, D., & Premack, A. (2005). *心の発生と進化：チンパンジー、赤ちゃん、ヒト*（長谷川寿一、監修・鈴木光太郎、訳）. 東京：新曜社.（Premack, D., & Premack, A. (2003). *Original intelligence: Unlocking the mystery of we are*. New York: McGraw-Hill.）
例 2 Lazarus, R.S., & Folkman, S. (1991). *ストレスの心理学：認知的評価と対処の研究*（本明 寛・春木 豊・

- 織田正美,監訳). 東京:実務教育出版. (Lazarus, R.S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer.)
- 例3 フォアマン, N.・ジレット, R. (2001). *空間認知研究ハンドブック* (竹内謙彰・旦 直子,監訳). 大阪:二瓶社. (1997). (原著が参照できず、著者名の綴りも不明の場合)
- g. 書籍の特定部分の引用の場合、表題に章番号などが書かれている場合は省略する。編集者には“(編)”を付記し、“,”を入れて書籍名を書く。特定部分ではなく書籍名を斜体(イタリック)にする。所在ページの前に単数ページの場合には“p.”を、複数ページの場合には“pp.”をつけ、“()”でくくる。
例 藤永 保. (1997). 心理学と文化の関わり:歴史の中から. 柏木恵子・北山 忍・東 洋(編), *文化心理学:理論と実証* (pp.3-16). 東京:東京大学出版会.
- h. 数巻にわたる書籍の1巻の特定部分の場合、シリーズ全体の編集者には“(シリーズ編)”を付記する。巻数は副題に書く。
例 岡田 努. (2011). 質問紙調査法の基礎. 岩立志津夫・西野泰広(編), *日本発達心理学会(シリーズ編), 発達科学ハンドブック:2 研究法と尺度* (pp.40-47). 東京:新曜社.
- i. 雑誌の場合には、著者名・刊行年次・論文題・雑誌名・巻・ページを順に記載する。雑誌名は省略せず、斜体(イタリック)にする。巻数は太字体(ボールド)にする。ページの前には、5.3g. のような“p.”や“pp.”はつけない。ページが複数の場合には、最初と最後のページを半角のハイフンではさんでページを記す。行末で数字が切れる場合には、その前で改行する。
例1 赤木和重. (2004). 1歳児は教えることができるか:他者の問題解決困難場面における積極的教示行為の生起. *発達心理学研究*, **15**, 366-375.
例2 子安増生. (2009). 「心の理論」の発達. 榊原洋一(編), *アスペルガー症候群の子どもの発達理解と発達援助(別冊発達30)*, 105-112. 京都:ミネルヴァ書房.
- j. 各号が独立にページづけされていて、1巻を通してのページづけがない場合に限り、巻数の直後に号数を“()”内に記す。1巻を通してページづけされている場合は巻数のみ記し、号数を記さない。
例 高橋 登. (2003). 子どもと言葉遊び. *言語*, **32** (2), 36-44. 東京:大修館書店.
- k. 紀要・報告などの場合、名称が同一でいくつかの部門・シリーズに分かれている場合にはその内容を副題に示す。紀要・報告などの名称に、その大学等の名称が含まれていない場合は、括弧に入れて記す。
例1 内藤健一・山本利和・杉本佳隆. (2006). 高齢者の空間認知研究の動向. *大阪教育大学紀要:第IV部門(教育科学)*, **54**, 95-114.
例2 若松養亮. (2007). 大学3年秋における進路意思決定と入学時状況との関連. *パイディア:教育実践研究指導センター紀要(滋賀大学)*, **15**, 129-136.
- l. 学会発表の場合。
例 高松みどり・渡部雅之. (2011). 空間的視点取得能力の生涯発達:幼児から高齢者までの反応時間パターンの変化. *日本発達心理学会第22回大会論文集*, 203.
- m. 印刷中の場合は、刊行年次を“(印刷中).”とする。複数ある場合は“(印刷中 a).”のようにして区別する。
例 根ヶ山光一・仲真紀子. (印刷中). ……
- n. 刊行された年次と表題の年次が異なる場合には、刊行年次は実際に刊行された年次を記す。
例 厚生労働省雇用均等・児童家庭局(編). (2008). *女性労働の分析2007年:均等法制定から20年働く女性の変化*. 東京:21世紀職業財団. (2007年版で2008年に刊行された場合)
- o. 博士・修士・卒業論文の場合、修士・卒業論文は年度によらず、卒業・修了の年をもって刊行年次とする。博士論文の年次は学位授与の年による。
例 斉田智里. (2010). *項目応答理論を用いた事後的等化法による英語学力の経年変化に関する研究*. 名古屋大学大学院教育発達研究科(未公開). 名古屋:名古屋大学.

5.4 外国語文献の記載方法

- a. 著者名は姓、名の頭文字の順に書き、間にコンマを入れる。ミドルネームがある場合にはその頭文字も書く。同姓で頭文字も同じ著者が複数ある場合には、名も略さずに書く。
例1 Kagan, J.
例2 James V. Wertsch は Wertsch, J.V.
- b. 共著の場合、著者名はコンマで区切り、最後の著者の前にコンマと“&”をおく。
例1 Underwood, B., & Moore, B.

例 2 Ainsworth, M.D.S., Bell, S.N., & Stayton, D.J.

- c. 団体名義の著作物は正式の名称を略さずに書き、個人著者名と同様、アルファベット順に並べる。
例 American Psychiatric Association.
- d. 書籍の場合には、著者名・刊行年次・表題・出版社を順に書く。著者名の後にはピリオドをうつ。編者が単独の場合には編者名に“(Ed.)”を付記し、複数の場合には“(Eds.)”を付記する。刊行年次は“()”でくくりピリオドをうつ。表題は斜体(イタリック)にし、最後に(副題がある場合はその後)ピリオドをうつ。副題は“:(コロン)”の後に書く。なお表題と副題は、最初の文字だけを大文字にする。出版社の前には“:(コロン)”をはさんで所在地を書き、最後にピリオドをうつ。複数の所在地が記載されている場合は、最初に記載されているものか本社のを1つ示す。
例 1 Valsiner, J. (2000). *Culture and human development: An introduction*. London: Sage.
例 2 Wozniak, R.H., & Fischer, K.W. (Eds.). (1993). *Development in context: Acting and thinking in specific environment*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- e. 初版と異なる内容の版である場合、版数などを“()”内に明記しピリオドをうつ。
例 1 Denzin, N.K., & Lincoln, S. (2005). *The SAGE handbook of qualitative research* (2nd ed.). ……
例 2 Fehr, S.S. (ed.) (2010). *101 Interventions in group therapy* (Rev. ed.). London: Routledge.
- f. 書籍の特定部分の引用の場合、表題に章番号などが書かれている場合は省略する。編集者には“(Ed.)”(複数の場合(Eds.))を付記し、“;”を入れて書籍名を書く。特定部分ではなく書籍名を斜体(イタリック)にする。所在ページの前に単数ページの場合には“p.”を、複数ページの場合には“pp.”をつけ、“()”でくくる。
例 Slaughter, V., Jaakkola, R., & Carey, S. (1999). Constructing a coherent theory: Children’s biological understanding of life and death. In M. Siegal & C.C. Peterson (Eds.), *Children’s understanding of biology and health* (pp.71-96). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- g. 数巻にわたる書籍の場合。
例 Damon, W., & Lerner, R.M. (Eds.) (2006). *Handbook of child psychology* (6th ed.) (Vol.1-4). New Jersey: John Wiley & Sons.
- h. 数巻にわたる書籍の1巻の特定部分の場合。
例 1 Matusov, E., Bell, N., & Rogoff, B. (2002). Schooling as cultural process: Working together and guidance by children from schools differing in collaborative practices. In R.V. Kail & H.W. Reese (Eds.), *Advances in child development and behavior: Vol.29* (pp.129-160). San Diego, CA: Academic Press.
例 2 Freud, S. (1961). The ego and the id. In J. Strachey (Ed. and Trans.), *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud* : Vol.19 (pp.3-66). London: Hogarth Press. (Original work published 1923)
例 3 Schliemann, A.D., Carraher, D.W., & Ceci, S.J. (1997). Everyday cognition. In J.W. Berry, P.R. Dasen, & T.S. Saraswathi (Eds.), *Handbook of cross-cultural psychology: Vol.2. Basic processes and human development* (2nd ed., pp.188-216). Boston: Allyn & Bacon.
- i. 雑誌の場合には、著者名・刊行年次・論文題・雑誌名・巻・ページを順に記載する。雑誌名は省略せず冠詞や前置詞以外は最初の文字を大文字で書き、斜体(イタリック)にする。巻数は太字体(ボールド)にする。ページの前には5.4g.のような“p.”や“pp.”はつけない。ページが複数の場合には、最初と最後のページを半角のハイフンではさんでページを記す。行末で数字が切れる場合には、その前で改行する。
例 Tomasello, M., Carpenter, M., & Liszkowski, U. (2007). New look at infant pointing. *Child Development*, **78**, 705-722.
- j. 各号が独立にページづけされていて、1巻を通してのページづけがない場合に限り、巻数の直後に号数を“()”内に記す。1巻を通してページづけされている場合は巻数のみ記し、号数を記さない。
例 Cherny, N.I. (1996). The problem of inadequately relieved suffering. *Journal of Social Issues*, **52** (2), 13-30.
- k. 学位論文の場合、その要約が“Dissertation Abstracts International (DAI)”もしくは“Masters Abstracts International (MAI)”で得られる場合には、DAIもしくはMAIの巻数とページを記す。原典を出典として使用する時には、大学名と年号を“()”内に明記する。未刊行の場合は、“Unpublished doctoral dissertation”(博士論文)もしくは“Unpublished master’s thesis”(修士論文)とする。
例 1 Groth, R.E. (2003). Development of a high school statistical thinking framework. (Doctoral dissertation, Illinois State University, 2003). *Dissertation Abstracts International*, **64**, 1202.
例 2 Fine, S. (2005). *Contextual learning within the residential outdoor experience: A case study of a summer camp*

community in Ontario. Unpublished doctoral dissertation, University of Toronto, Canada.

- l. 学会発表の場合。
- 例 1 Suchday, S., Friedberg, J.P., & Shelov, D.V. (2007). Socioeconomic status and health in developing countries: India. *Proceedings of 115th annual convention of the American Psychological Association*. Aug 17-20; San Francisco, CA.
- 例 2 Mills, M.E. (2004). *Evolution and motivation*. Symposium paper presented at the 83rd annual convention of the Western Psychological Association, April; Phoenix, AZ.
- m. 印刷中の場合は、刊行年次を“(in press).”とする。複数ある場合は“(in press-a).”のようにして区別する。
- 例 MacWhinney, B. (in press). ……

5.5 本文中での文献の引用方法

- a. 本文中に著者名を引用する場合は、原則として姓だけを書く。なお、翻訳書を文献に記載する場合は、必ず原著と翻訳書の刊行年次を示す。() 内で文献を引用する場合は、“()”ではなくコンマを使用する。また、文献の特定部分を引用する場合は、ページや図表を本文中で示す。
- 例 1 日野林 (2011) は……
- 例 2 Allen (2006) は……
- 例 3 ……ことが示されている (日野林, 2011)。
- 例 4 ……ことが示されている (Allen, 2006)。
- 例 5 ……ことが示されている (Freud, 1923/1961)。(原著が 1923 年発行で、引用した文献が 1961 年発行の翻訳書の場合)
- 例 6 …… (Smetana, 2011, p.175)。
- 例 7 …… (中垣, 2011 の Table 12 を参照)。
- b. 2 名までの著者名は毎回 2 名の著者名を連記する。3~5 名の著者名は初出時に全員を連記し、2 度目からは第 1 著者のみ示し、残りは日本語の場合には“ほか”、日本語以外の場合には“et al.”を用いる。ただし、第 1 著者のみにして文献間の混乱が起こる場合は、2 度目からも全員を連記する。6 名以上の著者名の場合は、初回から第 1 著者のみ示し、残りは“ほか”、“et al.”を用いる。ただし第 1 著者のみにすることで文献間の混同が起こる場合は、文献間の混乱が生じない著者名まで毎回連記する。
- 例 1 藤崎・倉田・麻生 (2007) は……
- 例 2 著者が 3~5 名の場合
白井・安達・若松・下村・川崎 (2009) は…… (初出時)
白井ほか (2009) は…… (2 度目から)
- 例 3 Wang, Dishion, & Selman (2010) は…… (初出時)
Wang et al. (2010) は…… (2 度目から)
- 例 4 …… (Piaget & Inhelder, 1948)。
- 例 5 著者が 3~5 名の場合
…… (Huttenlocher, Vasilyeva, Cymerman, & Levine, 2002)。(初出時)
…… (Huttenlocher et al., 2002)。(2 度目から)
- 例 6 著者が 3~5 名で、2 度目以降も全員を連記する場合
…… (渡部・片木・石川・川村, 2010; 渡部・片木・石川・渡辺, 2010)。
- 例 7 著者が 6 名以上で、文献間の混乱が生じない著者名まで毎回連記する場合
…… (本郷・澤江・鈴木・小泉ほか, 2003; 本郷・澤江・鈴木・高橋ほか, 2003)。
- c. 複数の研究を引用する場合は、5.2 に従って順に並べ、間を“; (セミコロン)”で区切る。
- 例 ……ことが示されている (秦野, 2006; 外山, 2010; 外山・長谷川, 2011)。
- d. 同一著者名あるいは同一配列の共著者名を複数引用する場合は、2 番目以後は刊行年次だけにする。
- 例 ……ことが示されている (子安, 2010, 2011; Newcombe & Huttenlocher, 2005, 2006)。
- e. 同一著者の同一年度の研究を複数引用する場合は、a, b, ……をつけて区別する。
- 例 ……ことが示されている (岩立, 2005a; 仲, 2010a, 2010b, in press-a)。
- f. 異なる著者で、同一姓、同一年の文献の引用があり、混同の恐れのある場合、原著が日本語以外であればイニシャルを、日本語であれば名を添える。

例1 M.Lewis (2010) は……

例2 …… (林 創, 2006)

- g. 投稿者自身の既刊文献の引用も、「著者は」などとせず、姓を記す。ただし、関連論文についてのみ、投稿論文中の引用時の著者表記は、姓ではなく「著者 (関連論文)」「著者ほか (関連論文 A)」などとする。(8.1「関連論文の提出」参照)

5.6 インターネット上の論文の引用について

インターネット上の論文や資料等を引用した場合、引用文献欄に記載する。著者名、年号、資料題名、サイト名、URL、資料にアクセスした年月日時を記すこと。印刷物となっている論文・資料等の場合は、5.1～5.4 に従うこと。なお、当該の論文・資料等がインターネット上から削除されることも予想されるので、必ずコピーをとって保管し、編集委員会からの請求があった場合には、速やかに提出できるようにすること。

例 内山登紀夫. (2011). 高機能自閉症について. 社団法人日本自閉症協会.

(<http://www.autism.or.jp/hfasp05/20021226koukinou.htm>) (2011年10月10日17時21分)

6. 添付票の書き方

編集事務の必要から、論文とともに添付票をウェブシステムに入力し、提出すること。

6.1 原著論文・実践論文・報告論文・展望論文の添付票

原著論文・実践論文・報告論文・展望論文の添付票では、次の事項を順に述べるか、学会ホームページにある書式をダウンロードして作成する。

- (1) 論文種別
- (2) 論文題 (日本語)
- (3) 論文題 (英語)
- (4) 著者名 (原語・アルファベット表記) と所属 (日本語、複数の場合には全員のもの)
- (5) 連絡先 (代表者、原則として自宅) ・電話番号 ・e-mail アドレス
- (6) 本文・文献・資料等 (1.5b. もしくは d. に書かれたものすべてを含んだもの) の刷り上がりページ数
- (7) 日本語要約の字数とキーワードの数
- (8) 英語要約の語数と Keywords の数
- (9) 日本語インパクトの字数
- (10) 英語インパクトの語数
- (11) 図表の数とスペース (刷り上がり後の概算文字数)
- (12) 脚注・付記の数、資料の数とリスト
- (13) 関連論文の書誌情報 (著者名、タイトル、公刊また公刊予定の雑誌名、公刊年等)
- (14) 欄外見出し
- (15) 過去の投稿情報 (再投稿の場合)
- (16) 利益相反 (COI) の申告

6.2 意見論文の添付票

意見論文の添付票では、次の事項を順に述べる。

- (1) 論文題 (日本語)
- (2) 論文題 (英語)
- (3) 著者名 (原語・アルファベット表記) と所属 (日本語、複数の場合には全員のもの)
- (4) 連絡先 (代表者、原則として自宅) ・電話番号 ・e-mail アドレス
- (5) 本文・文献の総ページ数
- (6) 利益相反 (COI) の申告

7. 投稿者用チェックリスト

論文を投稿する際は、ウェブシステム上の「投稿論文チェックリスト」に入力し、論文とともに提出すること。

8. その他

8.1 関連論文の提出

投稿論文と内容的に特に関係の深い同一著者による公刊または公刊予定の論文がある場合には、その論文のコピーを 1 部、PDF ファイルの形式にして、投稿論文とともにウェブシステムにアップロードする方法で提出する。その際、関連論文第 1 ページ上部に、「関連論文」（複数ある場合は、関連論文 A、B など）と大きな文字で朱書きすること。また、投稿者の氏名や所属がわかる部分と書誌情報（掲載誌名やページ番号など）は塗りつぶしておくこと。関連論文についてのみ、投稿論文中の引用時の著者表記は、姓ではなく「著者（関連論文）」「著者ほか（関連論文 A）」などにし、引用文献からは削除する。なお、「掲載可」となった段階で、通常の文献引用の書式に戻すこと。

8.2 利益相反（COI）の申告

投稿論文の発表内容に関して、本会の定める「利益相反（COI）に関する指針」により申告が必要な者は、発達心理学研究投稿論文添付票の該当する箇所に必要な事項を記入したうえで、署名・捺印し、事務局に郵送する。第一著者が共著者分をまとめて申告する。

8.3 修正対照表

修正後あるいは過去に本誌に掲載不可の判定を受けた再投稿の場合は作成し、論文とともに提出すること。修正対照表の作成方法は学会ホームページで確認する。

8.4 投稿原稿の扱い

投稿された論文の電子データは、ウェブシステムならびに学会事務局において適正に管理し、不要となった時点で迅速かつ確実に破棄する。

8.5 完成原稿の提出

「掲載可」となって必要な修正が終わった段階で、完成原稿と図表原稿を 2 部印刷し、指定された電子記録媒体とあわせて提出する。作成方法については、修正完了の通知とともに送付する作成手引きに従う。

8.6 校正と抜刷

- 初校の校正は著者が、再校以降の校正は事務局が行う。
- 校正の方法は日本心理学会「執筆・投稿の手びき」に従う。
- 著者に抜刷 20 部を贈呈するが、それ以上必要な場合は著者の負担とする。

8.7 参考文献・問い合わせ先

- この「手引き」に記載されていない事項に関しては、次の文献を参考にする。
日本心理学会. (2015). *執筆・投稿の手びき* (2015 年改訂版).
American Psychological Association. (2019). *Publication manual of the American Psychological Association* (7th ed.). Washington, DC: American Psychological Association.
- 投稿全般での不明な点については、編集事務局に問い合わせる。
問い合わせ先は学会ホームページの「投稿に関する案内」に示す。
- 電子投稿での不明な点については、ヘルプ・デスクに問い合わせる。
問い合わせ先は学会ホームページの「投稿に関する案内」に示す。

資料 1 Figure の例 1

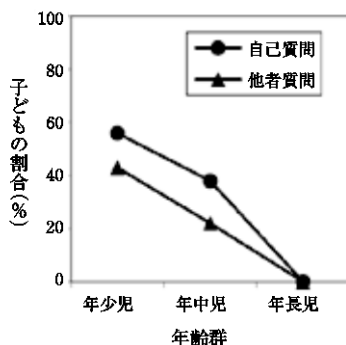


Figure 1 基本型の自己質問・他者質問で行為反応が出現した子どもの年齢群ごとの割合 (各群の平均年齢・年齢の範囲はそれぞれ以下の通り：年少児 (平均 3;8, 範囲 3;3-4;3), 年中児 (平均 4;6, 範囲 4;3-5;2), 年長児 (平均 5;7, 範囲 5;3-6;2))

資料 2 Figure の例 2

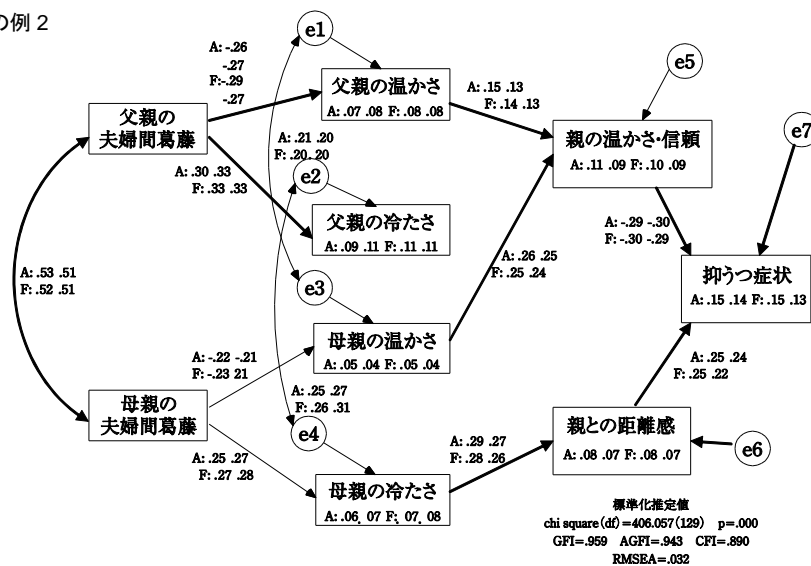


Figure 4 両親の夫婦間葛藤, 子どもに対する親行動, 子どもの親行動知覚と子どもの抑うつ症状の関係についての最終モデル (A に続く太数字は愛知サンプル男子の結果, 斜体数字は愛知サンプル女子の結果を表す。F に続く太数字は福島サンプル男子の結果, 斜体数字は福島サンプル女子の結果を表す。)

資料 3 Table の例

Table 2 二重課題およびマッチング刺激の各組み合わせにおける課題ごとの平均反応時間 (ms) と標準偏差

マッチング刺激	ノイズ条件		言語音条件	
	無意味刺激	有意味刺激	無意味刺激	有意味刺激
数字	633.50 (68.21)	647.25 (77.02)	651.60 (76.61)	664.74 (74.97)
ドット	705.61 (90.38)	728.83 (93.35)	702.66 (92.93)	722.99 (103.53)

注. () 内は標準偏差.